【参考】
出典：『新社会福祉援助の共通基盤第２版』P253～P258

2 いくつかの主要なアプローチ

（１）危機介入アプローチ

キャプラン（GeraldCaplan）は，「危機は，人が大切な人生の目標に向かうとき障害に直面したが，それが習慣的な問題解決の方法を用いても克服できない時に発生する。混乱の時期，つまり動転する時期が続いておこる。その間はさまざまな解決をしようとする試みがなされるが失敗する。結果的にはある種の順応が成しとげられ，それはその人と彼の仲間にとって，もっともためになるかもしれないしそうでないかもしれない 12)」という。
人は，人生行路のプロセスで，身体的・精神的・社会的な面でのさまざまな達成すべき課題に出会う。危機は，発達の変化，役割・地位による変化，偶然の出来事に遭遇したときに起こる。それは，死別，人生の発達段階における変化，卒業，退職などによる対象喪失，自然災害，PTSD（心的外傷後ストレス障害）につながるような出来事だけでなく，生活環境の変化，例えば，在宅から施設入所した場合の生活の変化に対する適応課題も危機といえる。しかし，危機は好機ととらえ直すことができる。危機を解決していくことによって，新たな自己の創造・成長の機会となるのである。
危機介入は，第一義的なソーシャルワーク介入の方法といえ 13)，危機状態にある人が均衡を回復する，あるいは均衡を再構築することを目指す。1960 年代から 1970 年代にかけて，ソーシャルワークのみならず，臨床心理，保健・看護，精神保健などの分野で発展した。
危機は，長期間に及ぶものではなく，通常４～６週間程度の限定された期間であるとされ，即時の介入が問題状況の長期化を防ぐことになるので，アウトリーチや，24 時間の相談受け容れ体制が重要になってくる。
そして，根本的な解決を目指すというよりは，当面のストレス反応を緩和することに力点がおかれ，限定された期間，回数で，短期間の援助を目指す。その人の内面を深く洞察し，パーソナリティの変革や成長を目指す医学モデルとは異なり，その人の長所を信頼し，新たな人生の構築を支援していくことが求められる。危機介入の方法は，第一に現在の危機状況を明確化することに集中し，クライエントの対処能力，利用できる援助資源を評価したうえで，具体的な対処計画を立案することになる。その前提として，クライエントの混乱状態を受け容れ，信頼関係を築き，クライエントの不安を緩和しておくことが不可欠である。

（２）エコロジカルモデル

エコロジカルモデルは，1970 年代以降，ソーシャルワークの主流となったモデルで，有機体と環境の関係を科学する生態学に立脚している。個人か環境かのいずれかに比重をかけるのではなく，人と環境の交互作用のなかに生じる生活問題に焦点を当て，個人と社会を相互に依存し合うシステムとみなし，両者を同時一体的にとらえる論理を実践のなかに導入しようとするものである。これは，ソーシャルワークの視点である「状況のなかの人」

を理解する基本的視座を呈示する。このモデルを提唱した代表格がジャーメイン（CarelB.Germain）である。
人間を環境との交互作用を通して成長する存在としてとらえ，その能動的側面を重視する。人は社会生活を維持していくために必要な環境資源を活用する。しかし，適切な環境資源が得られないときの不適合状態に陥る。環境は，人間の成長・発達の支えにもなるが，それを妨げることもあり，妨害がひどくなると不適合の原因になる。こうした不適合状態に着目するのである。
このモデルの特質は問題を評価するときに，その原因を過去にさかのぼって追究するのではなく，その人を取り巻く環境に目を向けて理解し，その現実に対して何ができるのか，何が必要なのか，どんな社会資源が必要なのか，政治・経済・文化状況を視野に入れて，総合的なかかわりをすることである。すなわち，クライエントを治療の対象とするのではなく，その人に影響する人間関係や何らかの生活上の変化，その時代の社会のありようなど，さまざまな次元における多数の要因について取り上げ，問題を複眼的に検討する。そして，個人と環境との接触面に介入し，人間が環境に能動的に働きかける対処能力の強化と，環境の応答性の強化を連動させ，両者の交互作用を改善させる。このモデルは，特定の援助方法を限定的に提示しているものではなく，援助過程において，クライエントと環境との関係の質に着目して，クライエントの潜在性を引き出しながら，適切な技法を選択的に活用する。具体的な道具として，エコマップ，ネットワークマップなどを活用していく。

（３）ソーシャルサポートネットワーク

状況のなかの人という視点は，人を取り巻く環境に着目し，人と環境を取り結ぶネットワークという概念をソーシャルワークアプローチに位置づけることになった。環境を遮断された人間は社会的な死に至るといえるが，人が生活過程で困難にぶつかったときは，家族や友人，近隣といったインフォーマルなネットワークを駆使して，その解決に向けて取り組んでいる。これには，自然発生的なネットワークに加えて，ボランティアグループや，当事者同士の支え合いによるセルフヘルプグループのように意図的に形成されたネットワークがある。セルフヘルプグループは，知識，情緒的支援，情報，資源を提供する重要なネットワークである。インフォーマルネットワークのメリットは，専門的援助関係が非対称な関係であるのに対して，役割の交換を含む，対等な相互支援関係に基づき，人のもつ潜在性の開発も期待できることである。
ソーシャルサポートネットワークアプローチは，このようなクライエントのインフォーマルネットワークを明確にし，インフォーマルな社会的ネットワークや，専門的支援や機関・制度といったフォーマルな社会的ネットワークを織り合わせていく介入方法である。ソーシャルサポートは，人が生活していくうえで重要な機能を果たしている。その機能は，自己評価サポート，地位のサポート，情報のサポート，道具的サポート，社会的コンパニ

オン，モチベーションのサポートに分類される 14)。ソーシャルサポートネットワークは，エコロジカルな視点に立ち，人がその人の環境との交互作用によってもたらされるネットワークの支持的機能の重要性に着目している。環境は援助資源の宝庫であるとみなすストレングス視点に立ち，フォーマルな援助とインフォーマルな援助の特質を踏まえて，ソーシャルサポートを顕在化させ，ネットワークを活性化，さらには創出していくのである。その際，ネットワークマップを援助の道具として活用するが，クライエント本人がネットワークをどのように受け止めているか，その主観的な側面についての考慮を忘れてはならない。

（４）ナラティブモデル

ナラティブモデルは，近代的なるものを懐疑する社会構成主義に依拠している。現実は社会的に構成されるという立場に立ち，唯一絶対の真実なるものが存在するのではなく，真実なるものは無数に多様に存在すると考える。援助場面においては，クライエントの文脈からとらえる視点が強調され，クライエントの日常性，つまり，クライエントが生きる生活世界の意味的な構成に着目する。権力をもつ側の声は正しいととらえられるのに対して，そうでない側の声は聴き届けられず周辺に追いやられることに注意を促し，「クライエント自身が自分の物語を書く」という考えから，クライエントが自分たちのコトバで語り，支配的な物語が変更可能であることに気づき，それに代わって，周辺にあった自分たちのもう一つの物語をソーシャルワーカーと共同で編集していく。ソーシャルワーカーはクライエントから学習するという立場をとり，ソーシャルワーカーとクライエントは対等な立場で協働作業に取り組み，クライエントが構成している世界を再解釈することになる。
ソーシャルワーカーの知識が絶対優位に立ち，ソーシャルワーカーの解釈に基づいて，問題を解釈し，問題解決に導くのではなく，クライエントが問題を自分からいったん切り離して外在化し，問題についての自前の物語を編集していくことによって，問題から解放されることを志向する。これは，専門職の知識や社会の支配的な価値観などの変革に結びつく可能性をもっている。
専門職主義は利用者から距離をおくことを当然とするが，そうではなくて，ソーシャルワーカーは，クライエントの描く個人的世界についての構成を傾聴し，自分自身の声をクライエントの声を求めるために抑制することが求められる。それはクライエントの主観的現実を認識することを意味する。クライエントが自分のコトバで問題に名前をつけることが，クライエントが自らの生活の支配権を獲得することにつながるのである。物語再構成の核にあるのは，クライエントの現実に基づいて展開する対話である。相互主体となる対話において，クライエントが自身のストーリーを語り，自身の熱望，人生の意味を定義することができるように勇気づけるのである。

（５）グループワーク

【参考】
出典：『新社会福祉援助の共通基盤第２版』P253～P258

グループワークは人間の集まりであるグループのもつ特殊な力動に着目し，グループを活用して，メンバー個々人やグループ全体が直面している問題解決のために側面的援助をする技術である。グループに参加している個人と，その個人をメンバーにして形成されているグループ双方を援助対象にするが，個人がグループの特性を活用して，問題解決・欲求充足できるように援助することになる。人は，誕生から死に至るまで，さまざまなグループに所属し，かかわりをもちながら成長していく。グループを活用する意義として，グループ活動によって，自分の存在を受け容れられること，また，自分がほかのメンバーにとって意味ある存在であることを実感する。つまり，グループ活動を通して，個々人は自己非難，孤立感を減じ，自己有価値感をつくり出す。さらに，自分自身と環境との関係性について，もう一つの見方をすることができるようになる。相互に影響を与え合う経験をすることによって，コミュニケーション・スキルを獲得し，つながりをつくることができる，などをあげることができる。

トーズランド（RonaldW.Toseland）とライバス（RobertF.Rivas）は，グループワークを治療グループと課題グループに分類し，ジェネラリストソーシャルワークの視点から個人，家族，集団，地域社会が機能していくために，グループワークをいかに機能させていくか論じている 15)。治療グループには，サポートグループ，教育的グループ，成長を目指すグループ，社会化を目指すグループがある。他方，課題グループは，組織的な問題への解決策を見いだしたり，新たな考えを生み出したり，あるいは何らかの意思決定を組織として行うのに用いられる。課題グループは，クライエントのニーズ，組織のニーズ，コミュニティのニーズに応えることを目的としている。具体的には，チーム，ケースカンファレンス会議，職員研修グループ，委員会，作業委員会，理事会，ソーシャルアクショングループ，地域の組織化を目指した連携のためのグループ，代表者会議などがある。従来，グループワークは，治療グループへの関心が高かったが，多職種による連携・チームワークが強調される今日，メンバー，グループの成長のみならず，組織運営のあり方，地域社会のサービスシステムの改善，ソーシャルワーカーの実践力の向上などを目標とする複合的な方法として理解することができる。

（６）コミュニティワーク

人間が地域社会で生活を営むとき，さまざまな問題に直面する。コミュニティワークは，地域社会のなかで生起する住民の共通的・個別的生活課題を住民主体で，組織的，地域協働的に解決していくために，地域社会の社会資源を整備し，地域住民の福祉意識を高め，福祉活動への参加を促進する技術であり，ミクロレベルの実践と密接に結びついている。

コミュニティワークの根底には，人々の社会生活上の諸困難を社会環境との関係のなかで構造的にとらえるエコロジカルな視点が備わっているといえよう。

人が地域での生活を維持するのを支援していくために，フォーマル・インフォーマルな援助を織り合わせていくケアマネジメントは有効な技法である。その前提には，ニーズに対

応した社会資源が整備され，生活基盤である地域社会の福祉力を強化することが不可欠である。住民主体の支援活動において，住民・地域社会の長所に着目し，地域資源の活性化を図るストレングス視点が，重要な視点となる。マッキーバー（RobertM.MacIver）は，コミュニティを地域性，コミュニティ感情（われわれ意識・役割意識・依存感情）をもち，ある程度の社会的凝集性をもつ共同生活の一定領域としてとらえ，「本来的に自らの内部から発し，（自己のつくる法則の測定する諸条件のもとに）活発かつ自発的で自由に相互に関係しあい，社会的統一体の複雑な網を自己のために織りなすところの人間存在の共同生活のことである 16)」と定義づけている。地域社会には社会的に孤立し，不利な状態におかれている人たちが存在する。こうした人たちを包み込み，つながりを創出していくことが求められるが，住民の福祉意識を高め，ソーシャルインクルージョンを実現していく方法としてコミュニティワークは重要な技術といえる。地域住民の生活課題・福祉ニーズの発見とその解決に向けてのプロセスにおいて，ソーシャルワークリサーチ，ソーシャルアクション，コミュニティディベロップメントなどの技術と密接につながっている。

（７）スーパービジョン，コンサルテーション

スーパービジョンは，ソーシャルワークの萌芽期にすでに始まっていたといってよい。スーパービジョンの意義が認められ，その概念が展開してきたのは，専門教育を受け，実践経験を積み，専門的な訓練を受けることがより効果的な援助に結びつくと認識されてきたことによる。スーパービジョンは，クライエントに質の高い援助を確保するために組織的責任でもって教育・管理をするものであり 17)，間接的援助技術ととらえることができる。よりよい援助のためには，自己の実践を振り返り，評価していくことが不可欠である。また，実践にはつまずきがつきものであるが，燃えつき症候群に陥るのを予防するための技法ともいえる。

スーパービジョンの機能は，教育的機能，管理的機能，支持的機能の三つに整理でき，一般的には，スーパーバイザーからスーパーバイジーへという専門的力量の差を前提にした上下関係に基づくが，スーパーバイジー同士の横の関係によるピアスーパービジョンも活用されている。それは，仲間同士のピアサポートともいえる，対等な関係による支え合いの教え・学び合う関係の有効性が認められているからであろう。実際には，実践の拠点，領域，内容，ソーシャルワーカーの力量，スーパービジョンの対象などに合わせて，適切な方法を活用することになる。援助の方向性を検討するとともに，現任訓練の場でもある事例研究法は，スーパービジョンの実施方法の一つである。ソーシャルワーカーは経験を積み，スーパーバイザーの役割を取得し，人材育成に取り組み，技術を伝達・指導するスキルを獲得していくことが求められる。

スペクト（HarrySpect）は，スーパービジョンの管理的側面に着目し，ソーシャルワーカーが自律性をもち，実践の高い水準を維持することを保証するために，管理から分かれた専門職の活動として，所属機関外のコンサルテーションの重要性を強調している。管理的

【参考】
出典：『新社会福祉援助の共通基盤第２版』P253～P258

側面が強すぎると，クライエント関係よりスーパーバイザーとの肯定的関係を維持することを望むようになるという 18)。管理的機能をもたないのが，コンサルテーションである。それは，ソーシャルワーカーが関連領域の専門家から相談援助を受ける過程である。チームアプローチが求められるなか，保健・医療職など多職種と協働していくことが多い。関連領域の専門的知識を得ることは，クライエント像の多様化に対応しサービスの質の向上のために不可欠といえる。その一方で，ソーシャルワーカーがコンサルテーションを担うこともある。